

## 想定外の世界での芸術

榎木野衣  
さわらぎの

地球が現状で生命体の生息できる太陽系で唯一の惑星であることは言うまでもない。しかしながら、その環境が整っているのは、地表の中でも紙のように薄いごく限られた領域にすぎない。にもかかわらず私たち人類は、オゾンを蓄えた成層圏や

高熱のマントルから距離を置くことで守られているにすぎないプレート面の一部をグランド大地などと呼び、絶対的に安定したものと見なすことで、不遜にも文明や歴史と称するものを地球の前景として上乗せしてきた。

だが、東の大震災で私たちが目撃した言葉を失うような事態は、いかにそれがふだんの「日常」から懸け離れていたとしても、地球が持つこのような先駆的で惑星的な諸条件を、むしろ頗るあらかじめするものだった。そのような視点に立てば、それを「災害」と呼んで大騒ぎするのは、人類が、自分たちの棲息環境だけを当然のものとしているからにすぎないのでない。この意味では、文明や歴史などという「虚構」を必要としない動物たちのほうが、人類よりもよほど地球環境に適応していると言えるかもしれない。

もしそうなら、東の大震災が伝えた過去に類例を見ない惨劇を目の当たりにして

私が啞然として言葉を失ったのは、ある意味、当然であった。私たちの言語活動そのものが「奇跡的な日常」を記述するためにしか使われてこなかつたからである。想定外のことが起きれば失語するのは当然だろう。東の大震災の直後には至るところで「想定外」という言葉が使われたが、宇宙環境の常態のなかで想定外に恵まれていたのはむしろ私たち人類のほうなのであって、あらかじめその外部の存在を想定すれば、どんなに巨大な災害でも、当たり前のことが当たり前に起きたにすぎない。だからこそ私たちは、古来より表現という特殊な活動を通じて、この想定外の世界につねに身を置く人類という存在について、日々のなかにありながら「日常」に埋没しきつてしまわぬよう、懸命に五感を駆使し、目前の世界を「見えるもの」とは別様に表現しようとしてきたのではなかつたか。そして、やがてそれが芸術と呼ばれるものとなり、長い時を超えて伝承されていったのであるまい。究極的には芸術を食い破るものとして災害があるのでなく、私たちが災害と呼ぶものこそ、芸術が生まれ落ちた起源としての母胎なのではないのか。

私たちは東の大震災以降、もう一度、外部にある「想定外」（宇宙）を「想定内」（日常）へと批評的に呼び覚ますような芸術を紡ぎ直す必要がある。とりわけゼロ年代は、日常のなかに閉じ込められた閉塞感からか、顕微鏡的な生の細部に宿る輝きを通じて「ここ」にはない「よそ」を彼方として想起し、その遠方から「いま